

2014. 1.27.

日本コミュニケーション学会九州支部

KYUSHU CHAPTER of The Communication Association of Japan (CAJ)

NEWSLETTER

No. 24

Jan. 2014

事務局： 住所：850-8506 長崎市片淵 4-2-1 長崎大学経済学部 丸山真純  
Tel:095-820-6376 Fax:095-820-6376 E-mail: kyushu@caj1971.com

## CAJ 九州支部第 20 回研究大会を終えて

第 20 回記念支部大会実行委員長 畠山 均（長崎純心大学）

### 継続は力なり

2013 年 9 月 28 日（土）、長崎純心大学で「異文化交流とコミュニケーション」を大会テーマに第 20 回記念支部大会を開催しました。この記念大会を私の勤務校である長崎純心大学で開催できた事は私にとって大きな喜びです。

開会式では長崎純心大学の片岡千鶴子学長に会場校を代表して歓迎の挨拶をしていただきましたが、その中で同大学が位置する場所の通称「恵みの丘」の由来について触れていただきました。

開会式に続き、長崎純心大学人文学部比較文化学科の片岡瑠美子教授による特別講演「日本のセミナリヨ・コレジヨで実践された教育」が催されました。片岡教授は 16 世紀に来日したイエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノにより長崎の地に創設された「セミナリヨ」「コレジヨ」で行われた特色ある教育について詳しく話され、日本史の教科書にも出てくるローマに派遣された 4 人の天正遣欧少年使節はセミナリヨで教育を受けてから旅立ったと指摘されました。「異文化交流とコミュニケーション」という大会テーマにふさわしい内容の特別講演であり、今日盛んに議論されている異文化コミュニケーション能力を培う学校教育の源流の一つは遠く 16 世紀の長崎にあるという事を改めて認識した時間でした。

午後は支部総会、個人研究発表と続きました。支部総会では支部設立 20 周年を記念し、



「20周年記念誌」を編集する事が決議されました。研究発表は多岐にわたるテーマで4人の会員が研究成果を発表され、良き学びの場となりました。懇親会は場所をがらり変え、長崎駅隣のパパスカフェで美味しいワインを飲みながら楽しいひと時を過ごし、会員相互の親睦を深める事が出来ました。

私は前々号のニューズレターで今年の支部大会が「これまでの九州支部の歩みを振り返り、支部の現状と課題を明確にし、今後のさらなる発展に向けて何をしていくべきかを共有し、それを実行していけるだけの勇気を得ることができる大会になれば」と書きました。今、大会を振り返った時、今回の大会がどの程度、この目的を達成できたかは分かりません。しかし、参加数20名と記念大会としてはちょっと寂しい感じではありましたが、支部大会が支部発足から20年間、毎年途切れることなく開催され現在も継続しているという事実に大きな価値があると考えます。何事も「始める事」も大変ですが、それ以上に「続ける事」も大変です。関係者が事の目的と価値を共有し、知恵とエネルギーを出し合っこそ物事は長く継続されると考えます。これまでの20年間、支部大会が継続されてきたことは支部会員をはじめ多くの学会員の理解と協力なしには考えられません。これからも支部大会が、会員の研究や教育実践の発表の場として、さらに会員相互の知的啓発の場として毎年開催されていく事を切に願うものです。継続は力なり。



←片岡千鶴子学長（右側）と伊佐雅子支部長（左側）



CAJ九州支部第20回大会にて(長崎純心大学)↑

## 特別講演の要旨報告

2013年9月28日、長崎純心大学人文学部比較文化学科教授で教鞭をとっておられる片岡瑠美子先生に、『日本のセミナリヨ・コレジヨで実践された教育』についてのテーマで講演をしていただきました。以下は先生に書いていただきました講演内容の要旨です。

## 演題：『日本のセミナリヨ・コレジヨで実践された教育』

講演者：片岡 瑠美子（長崎純心大学人文学部比較文化学科教授）

16世紀末、フランシスコ・ザビエルをはじめ、日本にキリスト教を伝えたイエズス会宣教師は、日本人を高く評価し、わが国最初の高等教育機関、セミナリヨとコレジヨを創設した。「セミナリヨ」は現在の我が国の学校制度では、中学・高等学校、「コレジヨ」は大学にあたる。



片岡瑠美子教授

### I 日本に於けるセミナリヨ、コレジヨの開設

#### (1) 巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ

ヴァリニャーノは巡察師として3度来日（1579-1582、1590 - 1592、1598 - 1603）し、日本宣教を効果的にするための大きな改革を実施した。第1回目の巡察の時、宣教師たちに語り、セミナリヨ、コレジヨの開設を決定した。

#### (2) セミナリヨ規則

ヴァリニャーノは、セミナリヨの開設に当たって、「セミナリヨ規則」を1580年に作成した。世界に広がるイエズス会学校の共通の規範「イエズス会学事規程」Ratio atque Institutio Studiorum Societatis Iesu（Ratio Studiorum）が完成した1599年より前に「セミナリヨ規則」が作成されていることは注目すべきことである。

セミナリヨは、1580年、織田信長、有馬晴信の援助を得て、安土と有馬に創設された。

コレジヨは、キリシタン大名大友宗麟の援助で豊後国府内に同年開設され、1598年から1614年の追放令までは長崎にあった。

(3) A. ヴァリニャーノ著『日本諸事要録』（1583年）、『日本諸事要録補遺』（1592年）「日本諸事要録」は30章から成り、第2回巡察の後、1592年に更に「日本諸事要録補遺」として、第15章までの補足説明を記している。

「日本諸事要録」第13章において、「日本はきわめて優れた大きい地方であり、その言語、習慣、並びに生活方法が我らとはまったく反対であるから、将来も設けられる無数の教会を日本人聖職者なしに司牧することが不可能であることは明白である。ことに彼らはその資格を受ける能力を十分備えている」と日本人を高く評価している。

ヴァリニャーノはセミナリヨを全寮制とし、定まった日課の中で、日本人としての人間的教養を身に付けさせるという適応主義、現実主義を実践している。学問の土台としてのラテン語重視、学力、才能に応じた段階的学級編成、理解の程度に応じて課題を与え個人的に指導することが特徴として挙げられる。

#### (4) セミナリヨの学習内容

ヨーロッパのセミナリヨでは、ラテン語とギリシャ語が中心であったが、「日本のセミナリヨ規則」ではラテン語ともに日本語を教えることを定めている。興味深いのは、

ヨーロッパ人がギリシャ語で学ぶべき古典を、日本においては、『平家物語』や『和漢朗詠集』のような文学を含む、日本の古典テキストに置き換えられていることである。

更に、歌唱やクラヴオとヴィオラなどの楽器を弾く時間があった。また、油彩画、水彩画、銅版画制作の時間も生まれ、教師としてイタリア人のニコラオが来日している。

#### (5) キリシタン版

ヴァリニャーノの計画によって日本に導入された活版印刷機で刊行した出版物「キリシタン版」一覧から、イエズス会が学生用のテキストとしてどのようなものを選んだかが分かる。『どちりなきりしたん』などの教理書はもちろん、『平家物語』『和漢朗詠集』『エソポのファブラス』『太平記抜書』『落葉集』（漢字辞書）などがある。『エソポのファブラス』は口語体日本語をローマ字で書かれており、セミナリヨの生徒たちのほか、来日した宣教師が日本語を学ぶテキストでもあったと思われる。我が国最初の翻訳物という価値を有する。

### II 天正遣欧少年使節（1582年—1590年）の派遣

キリシタン大友宗麟、大村純忠、有馬晴信の名代として「天正遣欧の少年使節」の派遣はセミナリヨ教育の実りである。

彼らは教会内部だけでなく、ヨーロッパ社交会においても使節の役割を果たした。ヨーロッパでは一大旋風を巻き起こし、研究者によると、1585年だけでも彼らに関する出版物は47種刊行された。日本のセミナリヨの生徒たちも刺激され、ラテン語学習が目覚ましく進歩したと報告されている。

### III コレジヨのテキスト『講義要綱』（コンペンディウム）

コレジヨにおいても、哲学・神学・自然科学のテキスト「講義要綱」が、1593年にペドロ・ゴメスによって完成され、2年後日本語に翻訳された。ラテン語手稿本は1939年にヴァチカン図書館で発見され、第二部と第三部の日本語訳手稿本が、翻訳からちょうど400年の1995年にオックスフォード大学モードリン・カレッジで発見された。日本語手稿本に欠けている第一部の日本語訳は、内閣文庫所蔵『二儀略説』が該当することがラテン語手稿本との比較で分かっている。

ヴァリニャーノの大事業であった日本人司祭養成は、徳川政権によって全国的禁教令が公布され、宣教師が追放された1614年までに16名、追放された後日本以外のアジア、ポルトガル、ローマで司祭となった人数は25名、計41名という結果を出し、うち殉教した司祭は12名を数えている。

「長崎純心大学」は、この歴史と伝統ある長崎の地に、キリスト教ヒューマニズムを受け継ぎ、知恵のみちを歩み、人と世界に奉仕する、心豊かな人材を育成する目的で開設された。

## 特別寄稿(1)

宮下 和子 (鹿屋体育大学名誉教授・立命館大学客員研究員)

### 本邦初「スティーブン・フォスターレクチャーコンサート &国際シンポジウム」

2013年12月7日、立命館大学「ヴァナキュラー研究会」主催のレクチャー・コンサート及び国際シンポジウム「日本とアメリカ、歌の架橋～スティーブン・フォスター歌曲の受容と展開」が開催され、成功裏に終了した。本企画を客員研究員として3月1日に提案し9ヶ月余、京都-鹿児島-米国(カリフォルニア、ミネソタ、ペンシルヴァニア州)間の準備作業を経て長年の夢が叶ったいま、安堵感と達成感、何よりも喜びは言葉にならない。当初は米国から招聘者1名の予定が、最終的に4名へと拡大し、総勢5名の来日となった。



(右から Root 氏、Weed & Kendall 氏)

第1部のレクチャー・コンサートでは、ピッツバーグ大学ルート(Deane Root)教授による基調講演“Stephen Foster’s Songs as American Vernacular”に続き、同教授もボーカリストに交えたジョー(Joe Weed)とマーティ(Martha Kendall)夫妻によるフォスター歌曲の演奏がなされた。いずれの歌も演奏に先立ち、その時代背景について説明がなされ、フォスター(Stephen C. Foster, 1826-1864)の生きた南北戦争前夜の米国を身近に感じつつ、その歌曲を楽しみ、鑑賞することができた。

第2部では、フォスター歌曲のワークショップで始まり、ジョーのリードで会場一体となって「おお、スザンナ」や「草競馬」、「オールド・ブラック・ジョー」を歌い、質



疑応答も活発になされた。続く国際シンポジウムでは、ハウ(Sondra Howe)博士による“American Music in Meiji Era Japan”に続き、筆者による「スティーブン・フォスター再発見」の二つの講演がなされ、ルート教授によるコメントと今後の展望で総括された。気づくと予定時刻を1時間近くも経過していたが、終了後も音楽学者や新聞記者、フォスター愛好家を交えた活発な意見交換が続いた。

10日朝の授業での演奏も生まれ、一行の京都滞在は12/5-11となり、ハウ夫妻を除く3名は初来日だった。「初めての日本を心から楽しんでもらいたい」と願う筆者は、準備した日程表を日々更新し、国内の「フォスター・コネクション」の方々や立命館大学の教員や学生さんの助けを受けながら、二条城、清水寺、御所(英語ツアー)、金閣寺、

竜安寺、嵐山、新京極などの案内と共に、湯葉料理、和食、定食、お好み焼きなどを楽しんでもらえた。

「日本のクリーンさ。信じられない安全さ。日本人の親切さ。細微に行き届く配慮。時刻表通りのバス運行。紅葉の美しさ。古い歴史を抱く京都の魅力。野菜豊富な和食。古都の街に流れる米国のクリスマスソングにジャズ。」嬉しいコメントと同時に心に残ったのは、「石庭のイメージは？」という筆者の問いにジョーが即答した”Peace”である。



(清水寺で：右から3番目 Howe氏を取り囲む立石一家；左端筆者)

「次回は九州で！」、筆者の気持ちは、さらなる夢に向かってはやっている。

## 特別寄稿(2)

青柳 達也 (福岡大学大学院)

### 演劇の可能性について

演劇が社会にもたらす可能性について、大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授である平田オリザ氏を筆頭に様々な活動が全国的に広がってきています。2012年に出版された代表的な諸著「わかりあえないことから～コミュニケーション能力とは何か～」からもわかるように、コミュニケーション分野との関係もあると言えます。私は演劇学をアメリカの大学・大学院で学んできた経緯もあり、演劇を社会において活用する可能性について幅広く捕らえています。そこで、今回はその可能性について、私の活動や経験を踏まえて紹介したいと思います。



まず、コミュニケーション教育という観点も含めて、演劇は教育的効果が高いと言えます。今までの研究や活動を通じての持論ですが、下記のような効果をもたらすと考えます。

- ① 失いつつある基本的な人と人の生のつながりを与えることができます。
- ② 人間に無くてはならない、責任感、創造力、想像力を育むことができます。
- ③ 自分の気持ちや意見を発信することで、自分に対する自信や肯定感を持つことができます。

- ④ 心と心の結びつきを感じ、思いやりを持った協調性豊かな人間になります。
- ⑤ 身体と言葉でのコミュニケーション能力を高めることにより、自己表現力が豊かになります。
- ⑥ 失敗や間違いに恐れることなくお互いを認め合える信頼関係を作ることができます。

演劇を作る過程においては、必ずコミュニケーションが生まれ、お互いの意見やアイデアを出し合い、それを自分達の言葉や身体で表現をして形にすることが求められます。また、人間は場所や状況に応じて意識的にせよ無意識的にせよ日常的に演じていると言えます。より効果的に演じることを学ぶことは、日常の生活に応用できるスキルの習得になると言えます。

では、具体的にどのように演劇が役立てられているかを説明するために、様々な自治体や団体との活動事例を紹介したいと思います。

- ① 市民活動推進課が勧めている「協働」を一般市民の方々にわかりやすく理解していただく目的で、協働の事例を基に寸劇を作成し上演しています。
- ② 人権同和政策課の依頼により、人権・同和の問題に関する演劇を作り上演しています。またシナリオとDVDを作成し、教材として利用していただいています。
- ③ 平和に関するイベントに、佐賀で起きた「佐賀空襲」をモチーフにした寸劇を作り上演することで、より身近に戦争を考えることにつながっています。
- ④ 幕末維新時代に佐賀が排出した賢人達（大隈重信など）のエピソードを基にした歴史寸劇を上演し、佐賀の歴史観光PRとして役立てられています。
- ⑤ NPO 団体からの依頼により、情報モラルに関しての寸劇を作成し上演することで、インターネット利用の危険性などの啓発に役立てられています。
- ⑥ 県の依頼により「結婚したい」「子どもがほしい」という思いを応援するプロジェクトの一環として、結婚や出産をテーマにした寸劇を高校や成人式で上演しています。
- ⑦ 県の文化体験鑑賞事業として、表現・コミュニケーション能力育成を目的として、小中高校において演劇ワークショップを開催しています。

演劇が始まったと言われる古代ギリシャでは、市民は劇場に集まり、人間の道徳やモラルなどを学んだそうです。つまりは昔から演劇は何か大事なテーマを伝える道具として活用されてきたのです。現代日本では演劇というものが一般的に定着しておらず、身近にあるものではない現状があります。ですが、様々な分野で役立つ演劇について少しずつ理解を深める事から始まり、草の根レベルで推進していくことで、演劇がもっと社会に求められるものになっていく可能性があると思っています。

## 特別寄稿(3)

佐藤 勇治(熊本学園大学)

### 40年振りのアメリカの高校同窓会に参加して

2013年8月23～24日は忘れられない人生の一コマとなった。AFS留学生として、アメリカのミネソタ州 Austin High School を卒業して40年ぶりの同窓会が開催されたので、7年



ぶりにアメリカを訪問したのであった。20周年同窓会にも参加したので、一部の人達は20年ぶりということでもあったが、大半の人達には実に40年ぶりの再会であった。

一学年が約500名の大規模クラスだったが、約100名の参加者があり、カクテル&ダンスパーティの前夜祭とディナー中心の本番で組み立てられていたが、感動の二日間であった。名前と卒業当時の写真が掲載された名札を皆がつけたので、何とか級友たちを思いだせたが、当時とあまり変わらない人から、「この人誰？」という変身ぶりの人までいて、40年という歳月の長さを感じずにはおれなかった。

私の事も覚えていてくれた人もかなりいて、また、はるばる日本から同窓会のために旅してきたということもあり、歓迎してもらった。記念に高校の建物とロゴマーク入りの写真、マグカップ、高級赤ワインを贈呈されて、同級生たちの温かい心遣いに感激した。また、当時デートに付き合ってくれた往年の美少女たちとも再会することができて、まさしく「青春プレイバック」であった。

ただ、嬉しいことばかりではなく、既に他界した人達も30人ほどいて、その中には私と親しくしてくれた仲間も何人か含まれていたもので、複雑な思いで彼らの写真をながめた。どれだけ生きながらえたかったことだろう。できることなら、彼らが昇天する前に、もう一度だけ会っておきたかった。振り返って、今生きている自分が何と幸福であり、また、彼らの分も含めて長生きをしなければと思った次第である。

アメリカには2回留学した、高校時代と大学院時代であるが、私にとってより意義深いのは高校留学である。18歳の純情可憐かつ多感な時代である。全てのことが新鮮であり、自分の未来への可能性を大きく育ててくれた一年であった。英語もろくにできず、環境への適応にもそれなりに苦労しながらも、生涯の宝物を得た時である。当時のホストファミリーと親友の2人とは41年間交流を続けている。CAJメンバーの研



究領域である異文化コミュニケーションも、これくらい長い交流を続けていると、多様な経験をすることで味わい深いものになっている。次は、50周年同窓会に参加できるように、とりあえずあと10年は長生きできればと思うこの頃である。

## 特別寄稿(4)

中嶋 友美 (西南学院大学大学院)

### 日本コミュニケーション学会九州支部 20周年記念大会に参加して



今回2013年9月28日、日本コミュニケーション学九州支部大会への参加をさせて頂き、先生方には大変感謝しております。学会への参加は今回が初めてで、貴重な体験をさせて頂きました。

私は、2013年春に西南学院大学社会福祉学科を卒業し、同年4月に西南学院大学大学院コミュニケーション学専修に入学しました。大学時代は社会福祉について学び、母校の高等学校で教育実習を経験しました。そこで私は、福祉と教育という異なる現場、あるいはその他あらゆる場面で耳にする「コミュニケーション」とはそもそもどのようなものなのか、という考えに至り、大学院へ進学し、コミュニケーション学を学ぶことに決めました。

今回の学会テーマの「異文化交流とコミュニケーション」について私が学んだことは、文化とは決して国単位ばかりではなく、私たちの周りには常に個人レベルでの文化の違いが存在しているということです。また、複数の文化が交わるとき、互いの文化は影響し合い、文化間にはパワーの差が生じます。マイノリティの文化は、マジョリティの文化に抑えつけられることがあり、彼らのアイデンティティは脅かされてしまいます。この現象は、私たちの身のまわりどこにでも生じることだと考えさせられました。

たとえば、今回の学会が開催された純心大学が所在する長崎についてです。日本におけるキリスト教が布教の中心となったのは長崎で、現在でも多くの教会や関連施設が残っています。しかし、数々の弾圧や禁教令(1614年)により、多くの宣教師やキリシタンが処刑され、当時長崎にあった教会はすべて破壊されました。こうした状況下で、日本のキリスト教は完全に根絶したと考えられていました。しかし、教会もなく神父もいない中で、信徒たちは地下組織をつくりキリスト教の信仰を守り続けました。そして、1873年に禁教の高札が撤廃されました。その後、県内各地に教会が建設されました。こうした歴史を経て、現在もなお美しいキリスト教の建造物が並ぶ長崎の姿があります。国の大きな力に抑えつけられながらも、自らの信仰を守り続けた当

時の信徒たちの姿の賜物といえるでしょう。

最後に、私事ではありますが、現在私は教育に関連するコミュニケーションに関心があります。今回の学会で学んだ「異文化交流とコミュニケーション」は、教育現場においても重要なテーマだと思います。今回の学会への参加は、学校という大きな場で、個人レベルで様々な文化を持つ個人が共に時間を過ごすことによって生じるコミュニケーションについて考えていくことへの、大変貴重なきっかけとなりました。

## 会員紹介

池田 理知子（国際基督教大学）

### 九州支部新会員として、よろしくお願ひします

2011年から、所属を関東から九州に移した池田理知子です。CAJの会員となって20年近くも経っているのに、なにを今さら支部の移籍など、と疑念を抱いておられる方も多いのではないか思いますので、自己紹介がてら、東京にある国際基督教大学に勤務している私が、なぜ九州支部会員になったのかを、この場をお借りして説明させていただきたいと思います。

CAJや九州支部の年次大会での発表やジャーナル論文などを通して、私の研究の多くが水俣に拠点を置くものであることをご存じの方は多いと思います。その水俣に初めて行ったのが2009年でした。水俣の人たちとその地の求心力には圧倒されるものがあり、通い始めて1年も経たないうちから、老後の落ち着き先はここしかない、と心に決めていました。そうこうしているうちに、2011年3月11日のあの日がやってきたのでした。

地震直後から、テレビとネットで必死に情報をかき集め、東京にいては危ないのではないかと判断したのが、15日の朝でした。なぜその日だったのか、もっと早く決断できたのではないかと後から振り返るといろいろな疑問がわいてくるのですが、錯綜する情報のなかであの時点ではそういう判断しかできなかった、としか言いようがありません。いずれにせよその日の午後、母と夫とともに郷里である鹿児島へと、東京を後にしたのでした。

鹿児島が故郷だとはいえ、30年以上も離れていると、それほど親しい親戚や友人が



いるわけではありません。むしろ水俣の方が、友人や知り合いが多くなっていました。そこで、母は彼女が子供の頃から親しくしていた人の家へ、私たち夫婦は水俣へと別れて、約 2 週間の避難生活をそれぞれ送ったのでした。そこでの生活は、もちろん先の見えない不安のなかではありましたが、それでも水俣の人たちに温かく迎えられ、その地の魅力をあらためて実感することができました。だからこそ、水俣に生活の拠点を移そう、という覚悟ができたに違いないと思っています。

夫が水俣で暮らし、私が水俣と東京を行き来するという生活が、あれからずっと続いています。そして 2013 年 3 月には、ついに水俣に家も建てました。伊佐先生は、さっそく遊びに来てくれました！ 皆様も、近くにおいでの際は是非お立ち寄りください。また、自分で言うのも何ですが、ちょっと変わった家（伝統構法によるエコハウス）なので、一見の価値があるのではないかと思います。少々宣伝じみですが、水俣への定住のいきさつや家づくりを通して考えたことなどを綴った本（『シロアリと生きる——よそものが出会った水俣』ナカニシヤ出版）が 2 月に刊行されますので、よかったら読んでみてください。私の専門である異文化コミュニケーションについて、これまでとは一風変わった角度から切り込んでいます。

ということで、生まれも育ちも鹿児島である私は、以前から九州支部には思い入れがあり、九州支部会員に正式になれたことをとても光栄に思っています。これからもどうぞよろしくお祈りします。

## 20周年記念誌発行についての報告

### 支部長：伊佐 雅子（沖縄キリスト教学院大学）

2013 年 9 月 28 日（日）、長崎純心大学で開催された第 20 回記念支部大会の総会で、支部 20 周年の記念誌を発行することが承認されましたので、今月、編集委員会を立ち上げました。構成メンバーは、かつて支部長を務められた畠山均先生と佐藤勇治先生、ベテランの運営委員である宮下和子先生と清水孝子先生、そして、今後の九州支部の担い手である丸山真純先生と吉武正樹先生、私の 7 名です。

12 月 22 日（日）、第 1 回編集委員会を西鉄グランドホテル（福岡市）の「グランカフェ」で行いました。九州支部では、会議に先立つ食事が伝統となっていますので、ビュッフェスタイルのランチを楽しみました。あいにく佐藤先生は、会議の前日、タイの海外出張から帰国され、体調をくずされ参加できなくて、大変残念でした。

編集会議では大体の編集内容を検討しました。祝辞と挨拶、歴代の支部長からのメッセージ、歴史・年表の作成、支部大会や開催地の思い出・エピソード、過去のニューズレターからの記事の抜粋、支部紀要関連の記事、支部の歩みを映し出す写真などで編纂

することが決まりました。

編集日程として、1月中に原稿執筆を依頼し、原稿と写真収集の締め切りを5月末にする予定です。その後、6月下旬を目処に初校を出し、7月15日に締め切り、編集委員会を兼ねた支部大会運営委員会を8月2日に開催し、発行は10月1日とします。

1994年に九州支部が設立されて20年が経過し、当時の状況に詳しい方が少なくなり、今後は会員の皆様からの情報提供が頼りとなります。2014年度の支部大会で、会員のみなさまに配布できるように編集委員一丸となって努力しますので、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。



## お知らせ

(1) CAJ九州支部20周年を記念して、支部に貢献された橋本満弘先生が表彰されました。当日は参加できませんでしたが、写真が送られてきました。おめでとうございます。



(2) CAJ九州支部21回大会は2014年秋に大分市で開催されます。大会テーマは「介護・福祉とコミュニケーション」です。日時・場所の詳細は決まり次第ご連絡します。

## 編集後記

2014年、今年もどうぞよろしくお願い致します。ニューズレター24号の発行です！執筆にご協力してくださいました皆様、ありがとうございました。また、昨年12月発行の予定でしたが、発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。会員の情報交換の場として、このニューズレターが生かされることを期待しております。今年発行予定のCAJ九州支部20周年の記念誌のため、過去の写真を集めています。学会開催の写真があれば、是非お送りください。下記のアドレスまでお願いします。送り先：[sugatk@nbu.ac.jp](mailto:sugatk@nbu.ac.jp) 清水 孝子